

平成21年 3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520341

研究課題名（和文） 日韓対照役割語研究－相互翻訳と言語教育の視点から－

研究課題名（英文） The comparison of role language between Japanese and Korean:
From the standpoint of translations and linguistic education

研究代表者

鄭 惠先（JUNG HYESEON）

長崎外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40369856

研究成果の概要：「わし、あたし」などの人称代名詞や「ぞ、だわ、じゃの」などの終助詞で代表される「役割語」を対象にして、日韓対照と日本語教育の観点から、翻訳資料やアンケートなどを用いた調査・分析・実践を行った。その結果、両言語における役割語要素がより明確になり、また日本語は韓国語に比べて役割語が発達した言語であることが明らかになった。本研究によって、韓国人日本学習者への日本語役割語教育の必要性、日韓翻訳における役割語の重要性をさらに浮き彫りにすることができたと考える。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,500,000	0	2,500,000
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	500,000	0	500,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	0	3,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・社会言語学

キーワード：ストラテジー、方言、性別、年齢、翻訳スキル、サブカルチャー、役割語教育

1. 研究開始当初の背景

「役割語」は金水敏（2000）によって提唱された用語である。従来、多く取りあげられてきた「位相語」と「役割語」とのもっとも大きい違いは、「位相語」が実社会で用いられることばに注目しているのに対して、「役割語」はその使用範囲を実社会に限定しないということである。

本研究は、金水氏の役割語の定義をもとに、日本語と韓国語の翻訳本の中で役割語がどのように扱われているか、さらに、これらの

役割語の語彙や語法が持つ独特のイメージが、果たして翻訳本の中でも正確に伝わっているかという疑問を出発点としている。

日韓両国の文化伝達の媒介体の急速な増加により、必然的に日韓・韓日翻訳の質や精度についての認識もますます重みを増してきた。このような背景のもと、さらに金水（2000）を皮切りに日本でも「役割語研究」が本格化してきたことを機に、「日韓対照役割語研究」を進めることへの意義は大きいと考える。

従来の先行研究の中に、日韓対照役割語研究について扱った論考はなかった。これは対照言語学の観点からみて新しい分野であり、2004年に発表された本研究者の研究内容が本研究分野の発端であるともいえる。日本での役割語研究分野の全体から見ても、日韓対照役割語研究は新しい試みであり、今後、関連研究へ領域を広げていくのに一役を担うものである。

また、前述したように、「役割語」という概念は「位相語」とは違い、その使用範囲を実社会に限定しない。つまり、日常の言語生活の中で実際使われているかどうかに関係なく、母語話者の意識の中での「刷り込み」に注目するという点が、従来の位相語研究とは異なる点である。よって、本研究では、従来の日本語学での位相語研究でなおざりにされてきた虚構を含めた「物語」などを積極的に考察対象として取り入れ、日常の言語生活のみならず母語話者の意識にまで考察の範囲を広げて役割語を観察していく。

なお、翻訳という新たな考察の観点を提示することで、実用性を目指していることも本研究の独創的な点といえる。

本研究は「日韓対照」という観点を中核に置くが、考察内容では「方言研究」「習得研究」とも強い関連を持つ。

今までの方言研究の中で方言イメージについての論考としては井上史雄(1980)などがある。しかし、これらはあくまでも日本語内での研究に留まっており、日韓の方言イメージを相互比較するような論考は皆無と言っても過言ではない。さらに、従来の役割語研究に、方言との関連についての言及は見あたらない。しかし、鄭(2005)の結果から、方言形式が持つ役割語としての重要性和、両言語での方言イメージの対照の必要性が明らかになったのである。

また、韓国人日本語学習者の役割語習得に注目した鄭(2004)によると、上級以上の学習者であっても、役割語についての知識レベルは日本語母語話者との間にかなりの隔りがある。よって、韓国人日本語学習者の日本語役割語習得について、非学習者との比較、母語話者とのストラテジーの違いなどをより深層的に調べていくことが重要である。

2. 研究の目的

本研究では、日本語と韓国語の中で役割語が持つ意味と特性を浮き彫りにし、両者の共通点と相違点を明らかにするための調査と分析を進めた。これらの調査で得られた結果をもって、最終的には両言語間での翻訳の質

の向上と、ひいては役割語の日本語教育項目としての構築を目的としている。その内容をさらに具体的にまとめると、以下のとおりである。

- i. 日本語と韓国語の役割語的要素のズレから、翻訳上の不都合が生じることを明らかにする。
- ii. 日本語と韓国語の役割語はお互いに、相違点と共通点が多角的に交差しており、その様相をより具体的で明瞭な形で整理・説明する。
- iii. 本研究結果からの提言にもとづき、翻訳によって生じる心的ギャップを最小化することで、さらに高質な日韓・韓日翻訳の構築に役立てる。とりわけ、上級学習者の翻訳活動の際に、役割語翻訳の重要性を認識した上で活用できる基準を提案することで、専門翻訳のみならず、日韓・韓日翻訳全体の質を向上させることができる。
- iv. 対照研究に留まらず、本研究結果を韓国人日本語学習者・日本人韓国語学習者の言語教育へ生かすなど、他の言語研究領域への積極的な応用によって、言語学全体での相乗効果が得られるようにする。

3. 研究の方法

①資料調査に基づく仮説の立案

- i. 両国において役割語に関連性がある先行論文を収集
- ii. 両言語の文学資料、コーパス等の検索・調査・分析
- iii. 日韓・韓日対訳資料の検索・調査・分析
→考察項目となる役割語要素を抽出(項目例:人称詞、終助詞、フィラー、方言)
→考察への観点を分類(分類例:a.言語形式 b.方言 c.ストラテジー)

②調査方向の確立のためのサンプル調査

- i. 質問項目の決定と質問紙の作成
内容は上記の3観点をもとに、a.に関連して「人物像にあわせた言葉づかいの自由作文」、b.に関連して「日本国内での方言イメージ調査」と「両言語学習者の学習言語方言へのイメージ調査」、c.に関連して「両言語学習者の学習言語の方言習得レベル調査」を行った。
- iii. サンプル調査
まず、日本では九州地域、韓国ではソウル地域においてあわせて約30名規模のサンプル調査を行った。
- iv. 質問紙の修正
サンプル調査結果にもとづき、質問項目をはじめ様式等を再検討し、修正を行った。

③パイロット調査の実施と仮説の見直し

- i. 質問紙の作成、ヒアリング調査の質問項目表の作成
- ii. 両言語母語話者（韓国人日本語学習者、日本人韓国語学習者含む）に質問紙調査
- iii. 両言語母語話者（韓国人日本語学習者含む）にヒアリング調査

→パイロット調査結果を分析、文献及び視聴覚資料の再検討→質問項目の見直し→考察項目の削除・追加、考察観点の再整備

④本調査の実施

a. 調査地域

- ・韓国：ソウル・高麗大学校、春川・江原大学校、大田・大田大学校他、江陵・江陵大学校
- ・日本：京都・京都外国語大学、長崎・長崎外国語大学

b. 調査対象

- ・日本語母語話者と韓国語母語話者：両言語話者ともに、相手言語学習者・非学習者・方言話者の別を設け、分析の際、結果に反映させた。

c. 調査方式

- ・質問紙調査とヒアリング調査

⑤仮説の立証（結果分析）

- i. 質問紙調査の結果を分析
- ii. ヒアリング調査の結果を分析

→結果は以下のとおりである。

- ・両言語の言語形式と役割語：役割語的要素として働く言語形式を、言語別、品詞別、使用層別、時代別に分類・整理した。
- ・両言語の方言と役割語：両国でステレオタイプとして定着している方言イメージを検証し、役割語としての方言の類似点と相違点を明らかにした。
- ・学習者の戦略と役割語：韓国人日本語学習者の役割語についての認識と知識レベルを明らかにし、学習者の役割語習得には母語話者とは異なる戦略が働いていることを検証した。

⑥翻訳改善への提言

- i. 上記の調査結果にもとづいて公開中の翻訳物を分析した。それにより、翻訳過程の中で役割語が持つ重要性について改めて認識を深めた。
- ii. 調査結果によって明らかになった両言語役割語の共通点と相違点をもとに、日韓・韓日翻訳の際に必ず考慮すべき基本事項をまとめてマニュアル化した。

⑦日本語教授法への提言

- i. 学習者への役割語教育の必要性を広く促し、日本語教材や教授法への応用を働き

かけ、日本語教材開発や教授項目決定への反映、さらに応用方法を提案した。

- iii. 役割語を教育項目として取り入れ、学習者の意識を向上、上級学習者の翻訳活動のサポートとして役立てた。

4. 研究成果

日韓対照という観点から両言語の役割語の観察、分析、検証を進めてきた本研究だが、本研究期間の間、「両言語間での役割語翻訳の質の向上」と「日本語教育での役割語の学習項目化」という本研究本来の目的はある程度達成できたと考える。

具体的な成果を改めてまとめると以下のとおりである。

- i. 出版物や映像物、対訳資料などの考察、役割語の使用実態を把握した上で、両言語で役割語を生み出す具体的な言語形式を細かく提示できた（文末表現、方言など）。
- ii. 上で提示された両言語での役割語的要素について、日本と韓国の4地域で両言語母語話者への意識調査を行い、両言語、また両言語話者間の違いを明らかにすることができた。
- iii. 上の意識調査では、韓国人日本語学習者への調査も付け加えることで、両言語学習者の役割語習得の戦略を分析し、日本語母語話者との相違を検証することができた。
- iv. 上の分析結果をもとに、実際の日本語教育現場にて韓国人学習者向けの役割語教育を試み、学習者の意識向上に役立てることができた。

以上のように、これまでの研究では対訳資料の分析と意識調査による対照研究が主なアプローチ手法であった。そして、その結果を応用すべく、最後の段階として、上級韓国人日本語学習者への日本語役割語教育を試験的に実施し（「日韓翻訳演習」の指導で活用）、役割語教育の必要性和効果を確認した。引き続き、これからの研究では、実際の言語教育現場で活用できる、もっとも効果的な役割語習得法として「ネットを介した、学習者主体の相互学習システム」を提案・実践し、その効果を検証していく予定である。そして、その協同活動を参与参観することで、新たな役割語データを収集し、理論的な裏付けをさらに充実させていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①鄭惠先 (2008) 「日本語役割語に対する韓国人日本語学習者の意識」長崎外大論叢 12, pp. 49-58. (査読有り)
- ②鄭惠先 (2008) 「方言意識の日韓対照ー役割語翻訳の観点からー」, 『日本語科学』第23号, pp. 37-58. (査読有り)

[学会発表] (計3件)

- ①鄭惠先 「「役割語」教育を通しての日韓翻訳のスキルアップ」, シンポジウム・研究発表会「役割・キャラクター・言語」, 2009年3月28日, 神戸大学百年記念館
- ②鄭惠先 「韓国人日本語学習者の役割語の習得ー文末形式と方言に注目してー」, 日本語教育学会研究集会 (関西地区), 2007年9月29日, 独立行政法人日本学生支援機構 大阪日本語教育センター
- ③鄭惠先 「方言イメージの日韓対照」, 韓国日本語学会第15回学術発表会, 2007年3月31日, 韓国嶺南大学

[図書] (計1件)

- ①鄭惠先 (2007) 「日韓対照役割語研究ーその可能性を探るー」金水敏編著『役割語研究の地平』, くろしお出版

[その他]

ホームページ

<http://www2.nagasaki-gaigo.ac.jp/~jung/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鄭 惠先 (JUNG HYESEON)

長崎外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40369856